

トマト抑制作型における暑熱対策を用いた夏季高温に強い品種の比較検討

要約

「TTM-177」は、「みそら 64」に比べ生育が遅いものの、着果が優れ、裂果及び裂皮の発生が少ないことから、抑制作型に適した品種であると考えられる。

しかし、草勢維持や着果を向上させるために、遮光資材と遮熱資材の併用に加え、さらなる暑熱対策の導入や安定した収量向上のための管理が必要だと考えられた。

○ 展示のねらい

トマトの抑制作型において、夏季の高温による影響から着果不良や障害果の発生が問題となっている。そこで、暑熱対策として、遮光資材及び遮熱資材を塗布したうえで、2品種の夏季高温の適応性について品種比較を行う。

○ 主な成果

- ・ハウス内の日最高気温は、7月9～10日の定植以降、両区5段開花時期に当たる8月中旬まで35℃以上、それ以降も9月中旬まで30℃以上で推移した。遮光資材と遮熱資材を併用しても、着果が不安定となりやすい高温であった（データ略）。
- ・花数は、みそら 64 では6～7段で2～3花程度と少なくなったが、TTM-177 では各段で4花以上と安定していた（データ略）。
- ・着果数は、両区とも3段までは4果程度と安定していたが、高温の時期は2個程度の着果となった。みそら 64 では10段まで2果程度だったのに対し、TTM-177 の9段は4果と着果が向上した。調査期間での収穫段数は、みそら 64 が10段収穫に対し、TTM-177 は9段収穫と生育が遅かったことから、外気温の低下に伴い、最終段の開花期は着果しやすい気温だったと考えられた（図）。
- ・外観品質は、みそら 64 では後半の8段前後で裂果や裂皮、ざら玉が2割程度見られたが（写真）、TTM-177 では裂果や裂皮の発生はわずかだった。

(個)

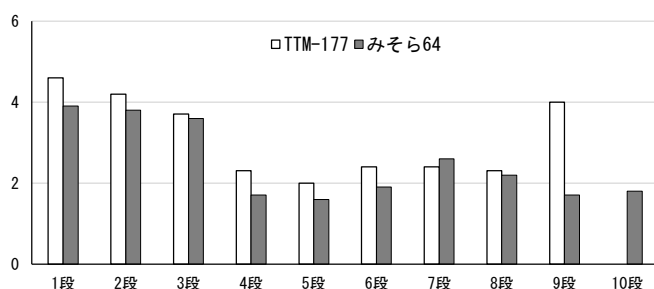


図 各果房段位における着果数の比較



写真 みそら 64 の裂果(同心円状)

○ 今後の方向性

夏季高温の影響により草勢や着果が安定しないことから、夏季に対応した作型や品目について検討する必要がある。

実施機関：河内農業振興事務所経営普及部

実施場所：宇都宮市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315